

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年七月十四日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織

狂言 柿山伏(かきやまぶし)

貝をも持たぬ山伏が道々嘘を吹こうよとは、いかにも狂言の似非山伏らしい登場です。柿の木へ登って柿の実を盗み食いする行儀の悪さ、畑主に見つかってなぶられ放題の間抜けぶり(動物たちの鳴き声や動作のまねはだれにも楽しい笑いの基本です)。修行を積んだ山伏なら鳶にもなると聞いたのに、飛ぶのをしくじってまだ産毛も生えぬと知ったとは、根が正直でもあるようです。その山伏の祈りの効験を結末でどう確かめましょうか。

能 熊坂(くまさか)

美濃の国赤坂といえは名高い東海道の宿駅です。近くの青野が原には往來の旅人を狙って盜賊が出没しました。とりわけ熊坂長範率いる群盜と金売り吉次に付き添う牛若との対決で知られます。それからどれほど後のことか、この地を通りかかった僧(ワキ)の前に、弔いを頼み自室へ案内する僧形の者(前シテ)がありました。庵室には武器を揃え、盜賊の難を払うといえます。夜更けに寢室へ入ってゆくように見えて、その者も庵室も消え元の草叢に戻りました(中入)。長範の亡霊と知った僧が弔う内に、娑婆の悪逆に執するその正体(後シテ)が現れて、牛若との最期の合戦を再現します。吉次の荷物に目をつけた長範たちは一行の寢静まるのを待って宿所に乱入しましたが、十六七の小男に遮られ、散々に切り伏せられ、残りも命からがら退却します。思いとどまった長範とても、奮戦空しく深手を負いこの松の根方に果てました。そう語り後世の救済を乞うていなくなります。

(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(僧)

角帽子をかぶり、無地熨斗目を着附に着て、上に水衣を着、腰帯をしめる。

後シテ(熊坂長範)

長範頭巾をかぶり、長霊べし見又は熊坂の面をかける。厚板を着附に着て、半切をはき、上に法被を着て絞上げる。腰帯をしめる。(持物、長刀)

終了予定 午後六時四十五分頃